

綿内克幸

ブクロ系の間臭さ溢れる、
骨太で繊細なポップス満載

昨年シングル「恋の5000マイル」でデビューした綿内克幸。1stアルバム「クロック・ワーク・ラヴァーズ」は、彼の幅広い音楽性の中でもスノッブでゴージャスな面をフィーチャーしたスパー・ポップなものだった。そんな彼が今度は、ぐっと骨太でラフな印象の2nd「メロウ・イエロー」をリリース。きらびやかさを削ぎ落とした分、

彼らしい、60Sロック／ポップスな匂いやメロディを、聴かせる。作品だ。

「前作とは全く打って変わって、シックなアルバムになってますね。こういう展開は計画通りってことでしたか？」

「漠然、とですけれどね。とにかく1stからそんなに時間もなくて、でもアコースティック・ライブとかで何度も1stの曲を反復するわけです。で、そこから抜け出したいという願望がありましたけど、飽きちゃったというか」

「反省点というのでは？」

「ではないですね」

「1stはもっとキラキラしてましたよね」

「してましたね。曲自体は変わってないですけどね」

「前作はベクトルがすべて外に向いているという印象があったんですけど」

「ちょっと斜に構えつつ」

「そう。そういう意味では今回は内面に向かっています」

「外に内面に向かっていますよね」

「で、メロディ的には変わってないですね。その辺をもっとよく聴いてもらいたい、ということに割りとシックな方向に行っただけでしょうか」

「その辺りのCDもよく聴いてたし。あと世間に対する反論も多少あったと思います。そのテ（渋谷系）に対する。とにかくお洒落関係抜きにしていう。僕は（池）ブクロ系ですから（笑）」

「（笑）それって池袋在住だからですか？ま、そういう音楽のお洒落さは綿内さんの中にあるものですよ」

「お洒落さとか洗練って絶対悪いことじゃないんですけどね。その垢抜けが片手落ちみたいになるのが嫌で、そこに人間臭さを出したかったんですよ。ちょうど70年代のNYサウンドとかもめっちゃくちや垢抜けているんだけど、でも人間臭いというような」

「で、ここでキラキラ度が減ったわけですけど、それは（対外的には）とても危険なことですよ」

「ええ絶対。でも格好良く言えば誰かがやらねばいかならうってことあったんで、僕はリスナーの耳を信用してるとこあるんですよ。その言葉（詞）もちゃんと書いてるつもりだし、この方が実は10代の女の子だけじゃなくてリスナー層が広がってくれるんじゃないかという希望的観測もあって」

「歌詞を大事にしてる、と僕は今作にはカタカナの単語さえ一つもない曲が3曲もありますよね。日本のポップス界には、サビのどこにはとなく英語の単語を持ってくる、という王道の逃げ道が今だはびこる中、それに対するアンチテーゼとも言えるような（笑）」

「でもありますよ、曲作りも含めて。ひよつとしたリスクも背負うんだけど」

「日本にも70年代にはそういうった日本語を大事にしたバンドって結構あり

ましたよね。はっぴいえんどとか。

「大瀧（詠）さんの1stアルバムとかね。ちょうど2ndのレコーディングと同時進行でその辺を聴いてたっていうのがあったんで良かったのかもかもしれません。今作には前みたいにならないうエッジな言葉も使って逆に青臭い。それはそういう心境だったんですね。そういう点では今回の方が感情的なアルバムですよ、質素ではあるけど喜怒哀楽満載って感じの」

「大江健三郎先生がノーベル文学賞を受賞されて日本の文学が改めて注目される中、今作は日本語ばかりの詞もありタイムリーですよ（笑）」

「まあ小沢健二とは違った切り口で。あの人は僕の方が響き優先ってところあるんで、やっぱり僕は歌とか声とかそっちを優先してやりたいですからね」

協力/ビクター・エンタテインメント



その辺りのCDもよく



「メロウ・イエロー」3000円（税込）
ビクター・エンタテインメント

CATCH the NEW!

CATCH the NEW!

CATCH the NEW!

モダン・グレイ

このサウンドから、自由映像イメージを描いて欲しい。



昨年9月、ナイル・ロジャース専属エンジニアのトム・デユラックをミキシング・エンジニアに迎えたミニアルバム『楽園』でデビューしたモダン・グレイ。VOの大西貴美とGの山口一久を中心に2人に結成。現在は2人の他、今井一郎（B）、堀宣良（Ds）元すかんちの田中尚人（Key）の5人。彼らのほとんどがプロクレスシヴ・ロックに多大な影響を受けているながらも、バンドとしては直接プログレは匂わせないポップな顔をキープ。繊細なVOとスケール感あるサウンドで独自の世界を作り上げている。また不思議な初々しさを漂わせるライヴも注目のm.g.今回、中学高校時代を京都で過ごしたというVOの大西貴美にインタビュー。

— すかんちの田中さんは（昨年8月正式加入、という経過で加入）？
「Gの山口一久と田中さんは昔からのプログレ仲間、以前から知り合いました。僕は山口君ほど彼のことを知りませんでした。すかんちのデビューの頃、見に行ったりしてましたね」
— やっぱ元すかんちだし、特にライブ面では、いい意味で彼に影響された、ということはあるんでしょうか。
「それはありますね」

— 実際ライブでの彼は大西さんに次ぐm.gの華（笑）。ところでメンバー皆さんピンク・フロイドやキング・クリムゾンと、結構年季の入った音楽嗜好のようですが、アルバムからは80S UKニューウェーブギター系の音が感じられて、懐かしさまで胸を駆けめぐらんですけど（笑）。
「駆けめぐりますか（笑）。まあ何だかんだ言っても僕らも80年代通過してます

からね。でも僕らが一番影響を受けたのはピンク・フロイドですからね。ただ彼らが80年代に一度ホーンと出てきたでしょう。それもあるでしょうし、やっぱり80年代は大切にしたいですね。でも意図はないです。後エフェクト処理とかが80年代的で、それは僕達も好きなんですよ」

— 歌詞も思春期的な歌があったり、それがノスタルジック。それで80年代的なニュアンスを生み出したのかもしれないね。
「m.gの一つのキーワードっていうのがあって、それはピンク・フロイドもそうなんですけど、絵の見える音楽というのが大事なキーワードになってるんです。音作りの時に、当然だれかが断片持ってきたりするんですけど、まず僕達は絵をイメージしてから音を作り出すんですよ。絵っていうものに関して当然詞も影響されてきますし、そういうことで絵の見える音楽は大切にしていきたいんです。でもそのイメージは僕達のイメージの御仕着せじゃなくて、各々のイメージを持ってもらいたいです。そのイメージがクリアになってくれれば、僕はそれがポップだと思っんです」

— 例えばアルバム2曲目の「花は何処へ行った」なら、ありますよねそんな映画。戦争から傷んで帰って来た「ジョニーは戦場へ行った」とか「マリアの恋人」とか。
「僕の村は戦場だった」とか「ミツパチのささやき」とか「絶望」とかね」
— （笑） どんどん出てきますね。テーマをもった映画は好きですか？
「好きです。僕映画好きなんです。京都時代はよく一乗寺の京一会館に行っていましたよ」

— 今は無き京一会館ですね。そんなマニアックな（笑）大西さんですが、そのVOの透明感とか歌詞の持つ繊細さが、思春期的なものや少年的なものを連想させますよね。
「ありがとうございます。本当の少年には少年の詞は書けないでしょう？」
— 少年期を通過したからこそ書ける？

「じゃないと書けないですよ、何でも。映画もそうですよね、とにかく映画を見て見て見まくってからじゃないと映像って絶対作れないですよ。表現で何でもそうだと思うんですよ。絶対一回終わらないと自分の中で始まらない。少年のイメージと言われることは僕はすごく嬉しいんですけど、でもそれは一回少年期が終わったから書けるんじゃないでしょうか」

— その少年期を京都で過ごして、その頃プログレの影響を受けて、で京一会館に通って。それだけで京都の人は大西さんのことを少しだけわかったような気になるかもしれませんね。
「そうかもしれませんね（笑）」
協力/スウィート・ハート、MCAビクター

modern grey



「楽園」2000円（税込）/MCAビクター